

1 研究テーマ

つながる、ひろがる、特別活動
 ～互いのよさや可能性を発揮し、よりよい生活を築く集団活動を通して～

2 テーマ設定の理由

学習指導要領では、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つの視点を踏まえた資質・能力が示されている。これらを育むためには、子供たち一人一人が自分の生活に目を向け、学級や学校の生活を向上させるために、各教科で身に付けた資質・能力を発揮しながら合意形成と意思決定を繰り返すことを通して、自分達の力で具体的な活動を計画・実践することが重要である。このような活動を通して、自治的能力や主権者として積極的に社会参画する力、他者と協働して生活上の課題を解決できる子供を育てていきたい。学校という小社会の中で、互いの良さや可能性を発揮し、よりよい生活を築くための活動の在り方について研究していくことをねらいテーマを設定した。

3 テーマに迫る具体的な視点

視点1「学習指導要領の目指す資質能力を育むための実践にする」
 学習指導要領に示されている13項目の資質・能力を活用し、これらを育む視点からこれまでの実践を捉え直したり、よりよい実践を生み出したりしていく。
 視点2「特別活動と教科の関連づけを図る」
 子供たちの生活そのものが学びとなる特別活動の特性を考えたとき、充実した実践のためには、十分な時間が確保されているとはいえない。このような現状の中で、特別活動の役割を最大限に発揮させるためには、特別活動を単体として捉えるのではなく、横断的な資質能力の育成の場として捉える必要がある。例えば、話し合い活動の経験で得たスキルが、教科の授業において個々の考えの練り合いの中で、どのように発揮されるかなど、特別活動で育まれた資質・能力が各教科でどのように発揮されるかということ視野に入れ、研究を進めていきたい。

4 テーマを踏まえた研修の計画(令和7年度～令和9年度)

	研修の計画(テーマや研修内容など)	分科会・研究講座・静教研の発表等
R7	つながる、ひろがる、特別活動 ～互いのよさや可能性を発揮し、よりよい生活を築く集団活動を通して～	研究講座
R8	県の研究テーマを磐周の研究テーマとする。	研究講座、静教研(湖西会場)
R9	県の研究テーマを磐周の研究テーマとする。	研究講座

5 令和6年度研究推進の内容

(ア) 令和6年度のテーマ

つながる、ひろがる、特別活動
 ～互いのよさや可能性を発揮し、よりよい生活を築く集団活動を通して～

(イ) 令和6年度のテーマに迫る具体的研究推進の内容

- ・分科会にて、「生徒主体の体育大会」の実践発表および協議
- ・県教研の発表内容の協議・検討
- ・各校(個人)の実践の紹介および協議

(ウ) 令和6年度の研究成果及び課題

<教職員の実践力向上> ※教員に身に付いた見方・考え方など
 各校の実践や抱えている課題を共有したことで今後の特別活動への実践意欲が高まった。話し合い活動は教師によって取り組み度合いに差があることが課題であった。そのため、学校で統一して取り組んでいる事例や子供から意見を出させ議題を決めていく子供主体の実践、学級力アンケートを活用した年間の見通しをもって取り組める話し合い活動など具体的な内容を知ることができ、教員の資質向上に直結していると考えられる。

<子どもの姿の変容> ※どのような手立てを講じたら、どんな力が付いたか。(どんな姿が見られたか。)

小学校1年生の話し合い活動では、子供たちが学級の課題を考えさせるために学級力アンケートを参考に作成したチャートを活用した。課題が数値化されているため課題が明確であり、低学年でも話し合いが容易になった。また、自分たちで決めた解決方法を実践し、定期的に振り返りを行うことで、学級内の自分たちでよりよく生活していこうという意欲の高まりが見られた。話し合い活動を繰り返していく中で合意形成も少しずつできるようになり、話し合う目的を意識して解決方法を考えられるようになってきた。アンケートを7月と11月に実施し、「約束を守って生活をしている」という項目では、83%→87%、「行事やクラスの係の活動に意欲的に取り組んでいる」という項目では、75%→83%と数値的にも高まりが見られた。他校でも、話し合い活動を取り入れた授業、よいところ見付けの活動、子供に任せて認める場面の設定等を行った結果、「先生は、友達との触れ合いを楽しんだり、学力を高めたりするための活動を、自分たちに任せてくれている。」の項目でR5 56.3%→R6 65.9%という高まりが見られた。